

浄土

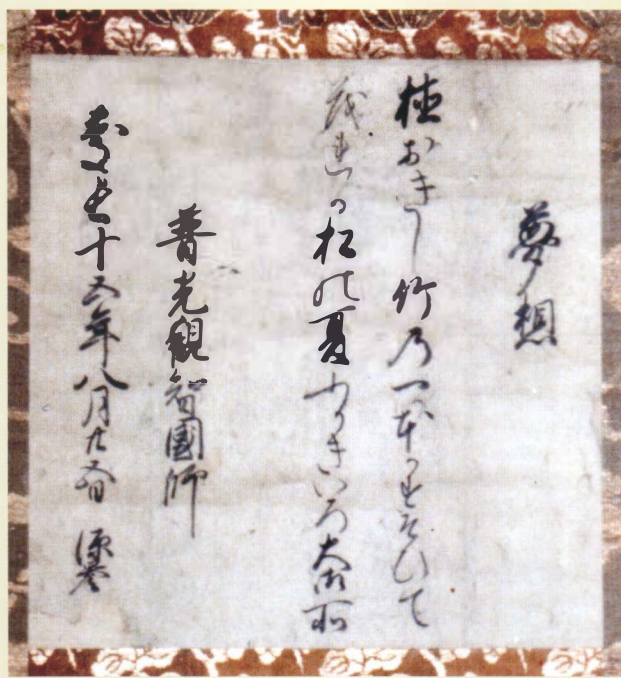
monthly JÔDO

2019
June

6

法然上人鑽仰会

夢想の歌（現在 松江・信楽寺所蔵）



夢想

植おきし竹乃一本かすそひて
茂れる松の夏ふかきいろ 大御所

普光親智國師

慶長十五年八月廿五日 源譽

徳川家康公

夢想の歌

と

普光観智国師

鳥取・西蓮寺

根井一彦

今年は普光觀智國師源誓存応上人の四百回忌祥当の年であり、ご縁のある寺院ではそれぞれ法要が営まれる予定であると聞いている。

存応上人は天文十三年（一五四四）、由木左衛門利重の次男として武蔵国多摩郡由木に生まれ、同二十三年（一五五四）同国新座郡片山村の時宗の法台寺蓮阿のもとで剃髪した。

その後永祿四年（一五六一）に相模国岩瀬の大長寺に赴き、存貞に師事し、宗を浄土宗に改め、存貞のもとで宗乗を学んだ。

天正二年（一五七四）存貞の没後、師存貞の住した川越の蓮馨寺を去り、与野の長伝寺に閑居し、同八年十月増上寺十一世円也より五重宗脈を受け、同十二年五月に増上寺に入山し、十二世の法灯を継いだのであった。

天正十八年（一五九〇）八月、徳川家康公が江戸に入府後、家康公と存応上人との関係が生まれ、増上寺の復興整備が行われ、後の関東の大本山としての礎が築かれた。

慶長三年（一五九八）増上寺は貝塚から現在地の芝に移り、その造営工事が着手され、同十八年ごろまでに本堂・山門、経蔵がほぼ完成した。当時はその偉容を誇ったものと思われる。

同十三年十一月には勅願所の編旨ひんしを受くるとともに、代々の紫衣被着が許されたが、家康公はまた増上寺に高麗版・元版・宋版の三大蔵経及び八百両のそ

の維持費を寄進し、菩提寺としての増上寺の文化面での協力も惜しまなかった。その家康公が元和二年四月十七日他界した際、一ヶ月後の五月十七日に家康公の遺言通り葬儀を増上寺で行い、存応上人が導師を勤めたのであった。

この存応上人と家康公との深い親交のあることを示す掛軸を、私は四十年ほど前に京都の古美術商から買い求めたことがあり、その掛軸（表紙うらの写真）のことに關して少し記してみたい。

当時は存応上人のことについて私は何も知らなかったため、存応上人と関係のありそうな観智院のご住職土屋光道上人にお尋ねの手紙を差し上げた。すると土屋上人から玉山成元先生から教えられたことであるとして、丁寧な御教示を頂いた。

その中に玉山先生には『普光親智国師』（白帝社）というご著書があると記されていたので、早速求めて繙いてみたところ、その中に「北野神社文書」として、私が所蔵していた存応上人の筆になる「夢想」という同じ歌が掲載されていた。

夢想

植おきし竹乃一本かすそひて

茂れる松の夏ふかきいろ 大御所

普光観智國師

慶長十五年八月廿五日 源譽（花押）

能舜

これは大御所（徳川家康公）が詠んだ歌を存応上人が書き、北野神社の社僧の能舜に与えたもので、私の所蔵したものは恐らくその写しなのであらうと思われる。

歌の題の「夢想」とは「夢のお告げ」のことであるが、玉山先生はご著書の中で、二人の間に夢の話が飛び出すとなると、これは相当親密な間柄であつたといわなければならない。

と述べられ、その後、玉山先生は相ついで『三縁山増上寺』―開山聖聰上人と中興存應上人―、及び『天光院と観智國師』を出版され、そのご著書に私の所蔵した「夢想」の軸の写真を掲載して下さった。

ただ、そのご著書の中でも先生は大御所と存応上人とが親しかつたことを述べられるだけで、歌の内容については何も触れておられなかつたので、そのことについて以下に私見を少し述べてみたい。

大御所が夢に見た「竹乃一本」は恐らく竹千代（家光）のことを象徴するも

のであり、「茂れる松」は松平氏（徳川家）の繁栄を象徴するものであると大御所と存応上人は夢解きをしたのであろう。

慶長十五年（一六一〇）は竹千代が七歳で、弟国千代は五歳であったが、徳川家の第三代をどちらにするかについては、大奥などでは国千代を推す空気が強かった。

竹千代も国千代も母は秀忠の正室の「お江」であったが、竹千代は虚弱体質で多病の上、無口で癪癪もちの気の利かない子どもであった。

一方の弟の国千代は利発で、色白の鼻筋の通った愛くるしい幼童であったから、秀忠夫妻は国千代を偏愛しており、弟の国千代が世継ぎになるであろうという風評が広がっていた。

両親に疎んぜられ、大奥の冷たい空気の中で前途を悲観した竹千代は自殺さえも企てた。幸い乳母のお福（春日局）の発見が早く、大事に至らずに済んだこともあり、お福は駿府にいた大御所に面会してこのような事情を大御所に懇々と訴えた。

それから間もなく、大御所は江戸へ入城し、竹千代と国千代の二人の孫が出迎えたので、大御所は竹千代の手を引いて上段に昇らせ、国千代を下段に座らせて嫡子のけじめを衆目の中で示したから、秀忠夫妻も、それから後にはこの大御所の無言の意思表示に従ったという。

こうして將軍家の世継ぎが竹千代に定まったのは元和元年（一六一五）のことであると『徳川家光』（吉川弘文館）の著者藤井讓治氏は結論し、また『徳川家光』（ミネルヴァ書房）の著者野村玄氏もこの説に同意されているが、この元和元年は「夢想」の歌が詠まれた五年後のことである。

以上のことから考えれば、「夢想」の歌の持つ意味は重大である。

すなわち大御所は竹千代を世継ぎであることを神仏の夢のお告げによって決断したということになるからであり、慶長十五年ごろはさすがの大御所も世継ぎをどちらにするか、多少迷うところもあったと思われるからである。

もっとも老練な大御所は、存応上人に「夢想」の歌を書かせることによって、竹千代を世継ぎにすべきであるという意思をそれとなく表明しようとしたとも考えられるのであるが、いずれにせよ、「夢想」の歌の内容から考えると、大御所と存応上人との二人の間の関係は単なる「親密な間柄」というにとどまらず、徳川家の将来についても意見を交わし合うような堅い信頼に結ばれた間柄であったことになるのである。

「夢想」の歌の内容のもつ意味からすれば、このような書は幾つも書かれて、いくつかの寺社に奉納されたのであろうと考えられ、この書に関しては「本物」とか「偽物」とかいう判別は無意味であると私は考える。

（平成二十一年度鳥取教区普通講習会に於ける講話を補説したものである）

浄土

2019/6月号 目次

徳川家康公 夢想の歌 普光観智国師	根井一彦	1
法然上人と親鸞聖人●	林田康順	8
連載 微風吹動	工藤量導	14
連載 江戸の川を歩く	森 清鑑	18
連載小説 渡辺海旭●	前田和男	24
連載 マンガ さっちゃんはネツ	かまちよしろう	33
編集後記		34
表3 貧乏骨董	三宅政吉	



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
表紙写真＝鬼海弘雄
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

法然上人 と 親鸞聖人

【連載二十二】

親鸞聖人による
俱会一処への視座②

林田 康順

(大正大学教授)

仏が私を救うのではない。私を救うはたらきを仏という。

前回、親鸞聖人の俱会一処の理解をめぐり、龍谷大学の川添泰信先生や武蔵野大学の渡邊了生先生の論文を紹介しました。その中、渡邊先生は、親鸞聖人にとって俱会一処が成立する場は、あくまでも「方便化身土」に留まり、どこまでも「方便誘引の内容」であり、「伝道教化の一環」として理解すべきであると指摘されていました。かつて私は、龍谷大学と武蔵野大学の講演会・勉強会にお招きをいただき、法然上人と親鸞聖人の俱会一処を巡るこうした理解の相違を中心に講演を務めた経験があります（龍谷大学大学院真宗研究会・二〇〇二年度後期講演会「新しい親鸞聖人研究に向けた一提言」龍谷大学大宮学舎、平成一四年一二月三日。武蔵野大学仏教文化研究所勉強会「親鸞聖人の浄土―法然上人と対比して―」武蔵野大学七号館会議室、平成二三年五月二七日）。両日とも有意義な会で

あり、多くの実りある質疑応答も交わされました。特に武蔵野大学での勉強会では、聴衆の先生方同士で親鸞聖人による俱会一処の理解をめぐる議論が始まってしまい、発表者である私が置いてけぼりの状況となったことを覚えています。なるほど、これまで学術論文として正面から「俱会一処」を取り上げたことがなかったため、その理解の正確さや布教現場での対応などについて議論が伯仲したのです。

とはいえ、親鸞聖人にとつての阿弥陀仏や極楽浄土をめぐる理解は、それこそ親鸞聖人没後七五〇年間にわたり、営々と積み重ねられてきた長い歴史があります。そうした中、近代真宗学の碩学である真宗大谷派の安田理深先生は、次のように親鸞聖人にとつての阿弥陀仏を適切に表現されています。

仏が私を救うのではない。私を救うはたらきを仏という。

（東本願寺配布「揭示法語」）

「仏が私を救う」、これこそ浄土宗の阿弥陀仏に他なりません。法然上人にとつての阿弥陀仏は、「浄土三部経」に説示されているように五劫思惟して四十八願を建立し、兆載永劫の修行を経て成仏された仏です。さらに『選択集』第三章段に説かれているように、「四智・三身・十力・四無畏」という覚りの内容としての内証を体得され、「相好・光明・說法・利生」という外に向けた働きである外用をめぐらせて私達をお救いくださる仏です。つまり阿弥陀仏は、八万四千の「相」を示され、その一々の相に八万四千の「好」を具え、その一々の好から救いの働きを及ぼす八万四千の「光明」を放たれています。また阿弥陀仏は、今、現に極楽浄土において「說法」され、常に私達衆生に利益を施す「利生」の働きを続けておられるのです。まさに「私を救う」仏です。

一方、そのように姿形を具え、個々に救いの働きを及ぼす「私を救う」仏はどこまでも方便化身であって、「この私を救うはたらき」こそ真仏であると親鸞聖人は理解されたのです。なるほど、これまで述べてきたように親鸞聖人にとつての阿弥陀仏は、「南無不思議光如来」「帰命尽十方無礙光如来」という九字名号や十字名号に込められているように光明に託された働きそのものといえます。そして、親鸞聖人によつて「自然のやうをしらせんれう」（『正像末和讃』）と表現された、全宇宙・全存在を「自」ずから「然」らしめる「この私を救うはたらき」こそ阿弥陀仏に他ならないのです。

今私が「私」と言っているような私が、私でなくなった時……

あるいは、親鸞聖人にとつての浄土理解をめぐり、浄土真宗本願寺派の勸学である梯実（きんじ）円先生は、次のように表現されています。

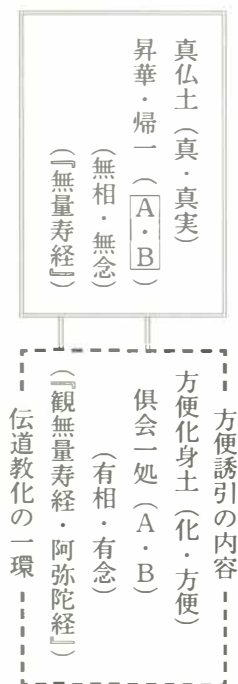
今私が「私」と言っているような私が、私でなくなった時、実は天地が一枚に解け合
い、そして万物が光輝いているような、そんな領域が開けてくる。そんな領域が浄土
の世界じゃないのか。（『教学シリーズ（10）往生浄土（上）―教学シンポジウム―』「親
鸞聖人の浄土観―二つの側面―」一九九五年、本願寺出版社、一四七頁）

こうした梯先生による指摘は、以下のように理解できます。つまり、親鸞聖人にとつて
の浄土とは、有相・有念なる存在としての（この私）が、「自然のやうをしらせんれう」
としての「この私を救うはたらき」を信受することによって、（この私）が、（この私）で
あると表現し、認識しているような自力の思いを払拭し、「こころもおよばれず、ことば
もたえた」る「無為・安楽・常楽・実相・法身・法性・真如・一如」（以上、『唯信鈔文意』）

などと表現される無相・無念の境地へと昇華・帰一された境地であるといえましょう。そして、そうした境地に到達した時、すなわち、真宗のいう絶対他力を正しく受けとめられたならば、娑婆として映っていた目前の世界が、阿弥陀仏の働きが及び続けている真実の浄土の世界として浮かび上がってくるのです。

安田先生や梯先生の所説を踏まえつつ、これまで述べてきた親鸞聖人によって理解された俱会一処への視座を図式化すると次のようになります。

【図】 親鸞聖人にとっての「俱会一処」への視座



つまり、Aさん・Bさんといった個別的認識を基本とする有相・有念の〈場〉、もしくは、その相対的關係を成立させる〈場〉を想定させる『阿弥陀経』所説の俱会一処の思想は、親鸞聖人にとっては「仏が私を救う」〈場〉としての方便化身土の世界であり、どこまでも「方便誘引の内容」に留まり、「伝道教化の一環」と捉えられます（以上、【図】下段）。一方、Aさん・Bさんといった個別性が昇華・帰一され、AさんがAさんでなくなり、B

さんがBさんと認識できなくなる境地まで無相・無念化された状態こそ、自力のはたらきが全否定され、阿弥陀仏という「私を救うはたらき」に我々の全存在が委ねられた真仏土の世界に他ならないのです。そして、「この私を救うはたらき」は時空を超えて及び続いているので、私達がこうした絶対他力の境地に到達し得た時、「天地が一枚に解け合い、そして万物が光輝いているような、そんな領域が開けてくる」ことになるのです(以上、【図上段】)。もちろん、渡邊先生がおっしゃるように、こうした状態は、「俱会一処」ではあり得ません。

自宗の儀に違するをばみなひがごとと心えたるは、いわれなきことなり

法然上人は、仏教における宗派の位置づけについて次のように述べられています。

自他宗の学者、宗々所立の義を各別にこころえずして、自宗の儀に違するをばみなひがごとと心えたるは、いわれなきことなり。宗々みなおのおのたつところの法門、各別なるうえは、諸宗の法門一同なるべからず、みな自宗の儀に違すべき條は、勿論なりと。(「修学についての御物語」昭法全四八六)

(試訳) さまざまな宗派においてその教えを学ぶ者が、それぞれの宗派で説く教えは各々個別の体系を持つとは理解せずに、自身の宗派の教えに異なるものはすべて間違いであると理解してしまうのは、正当な根拠を欠いています。宗派毎に立てられた教えは、それぞれ個別に体系づけられているのですから、各宗派の教えが同じはずなどないのです。他の宗派が自身の宗派の教えと異なるのは当然なのです。

すなわち法然上人は、いずれの宗派の教えも「各別」に体系化されており、それをわき

まえずに一方の宗派から他方の宗派に対し、その教義は浅薄な理解に過ぎないなどと批判するのは、正当な理由や根拠を欠いた不当な物言いに過ぎないと述べられます。こうした法然上人の所説は、そのまま浄土宗と真宗の関係についてもあてはまります。

これまで述べて来たように、法然上人と親鸞聖人による「浄土三部経」の理解には、決して埋めることのできない大きな溝が横たわっています。法然上人は、「浄土三部経」を弥陀・釈迦・諸仏の三仏同心になる真実の教えを示す経説として、一言一句を揺るがせにすることなく、そのまま尊く受けとめようと努められました。一方、親鸞聖人は、「浄土三部経」の総体をそのままに受けとめることをせず、「浄土三部経」所説の阿弥陀仏・極楽浄土の理解をめぐって顕説・穩彰の二義を提示して、その一方を真仏・真仏土を説く内容とし、他方を化身・化身土を説く内容であると真化分別を施されたのです。

その結果、浄土宗と真宗においては、同じ「浄土三部経」を所依の經典としていただき、阿弥陀仏・極楽浄土・本願念仏等と同一用語を使用したとしても、その用語の意味内容は似て非なるものとなりました。そうした点を踏まえずに議論をしても、お互いの土俵が異なっているのですから、まったくの水掛け論になり、有益な答えが出てくるはずはありません。そして、両祖師による「浄土三部経」理解の相違がもたらす、とりわけ信仰面において決定的・根本的な相違点として現出する経説こそ、『阿弥陀経』所説の「俱会一处」の捉え方であると考えられます。私自身の個人的な意見ですが、僧侶の法話に導かれて墓石に「俱会一处」と刻まれた門徒の方々は、その思いを胸に墓前に合掌・礼拝され、寺院や僧侶を大事にして来られたことでしょう。誰しもその思いを方便化身土に向けて捧げてこられたわけではなかったのであろうと拝察しています。

（続く）



微

風

吹

動

ときめきのまなざし

変わらないということに

いつでも不安になつて

今ここにあるものを憎んでしまうの
あなたのことさえも

(ヤン・フレンジー「ロンロンデイズ」より)

工藤量導

朝起きて、出かける前に服を選ぶ。その日の天気や気温、会う人、出かける場所などの情報を脳内に総動員してコーディネートを決める。あらためて思い返すと結構ストレスフルな作業だ。それでも、その日の気持ちにピタッと合ったものを選べるとそれだけで気分がよかつたりする。選ぶときの決め手は直感的な「ときめき」だろうか。逆に「ときめかない」のが捨てるときの基準だというのは、今をときめく「こんまり」こと近藤麻理恵さんの片づけ整理法だ。

ちなみに、人が物を捨てられない理由は、過去への執着（残しておきたい）と未来への不安（いつか使うかも）とのこと。まさに「今」と徹底的に向き合う仏道修行ながらの卓越したコンセプトだ。しかし、私自身それがどうにもうまくできない。不思議なもので、同じクローゼット内を眺めているのに、どれも良さそうに見えて悩む日もあれば、気分にあう服がひとつもないと思う日もあったりする。自分の判断力なんて頼りなくてとことん信用ならないわけだ。

実は案外一番うれしいのは、しばらくタンスのこやしになっていた服が、ある日ふいにすくいあげられ、「まだ着られるかもしれないぞ」と日常着のローテーションに復活することだったりする。

なぜうれしいのか。個人的には、過去の自分のチョイスを今の自分が褒めてくれているようなもので、過去と現在の自分が変わらず

つながっていることを確認して少し安心するからなのだと思う。とは言いつつ、本音は片づけがうまくできないことの言い訳と片づけ上手への小さな抵抗の気持ちだったりするのかもしれない。

結婚する前、よく小さなライブハウスへ足を運んだ。冒頭に紹介したのはその頃に出逢ったアーティストの楽曲だ。たしかOLをしながら、時間を見つけて音楽活動を続けていると言っていた。

誰もが一度は若かりし頃に「変わりたい」と思い悩んだことがあるはずだ。でもそうはうまく変われない。「自分探し」というのも、実のところ現在の不満足な自分を捨て去ってチェンジしたいという切実な思いのあらわれだろう。片づけブームも、そんな変わりたい願望とどこか同調する部分があるように思う。

さて、ライブに出かけたのは、僧籍を取って数年をへた頃だった。出家という以上、もつと何か変わらなければならないのではないか、周囲の期待にしっかりと応えられているのか、という漠然とした不安と焦燥感に駆られていた。整理しきれず、うまく片づかない暗澹たる思いを内心に抱えて、演奏の出だしをぼんやりと聴いていた。

ところが、である。歌詞の最終節にはからずも心がときめいた。

変わらないということは 奇跡ということ

そんな風に思えば変わっていきけるよ

変わり行く中でどこまでいけるのだろうか？

分らないけれども迷ったって良いや

私をつないでゆく

少し視点を転じれば、過去からの蓄積としがらみでがんじがらめに固められたボンコツのような自分のあり様も「奇跡」と呼ぶことができるのだ。「変わりたい」という憧れへの執われに、どうにか折り合いをつけ、迷いながらも踏み出す一歩を見出したところに、法然上人の教えの立脚点があるのではないか。そう思った。

凡夫（愚者）の自覚とは「変われない」、つまり過去への執着と将来への不安の真った中にあることの自覚と許容からリスタートし、そんなボンコツたちが生きる意味を問い、逆襲の狼煙をあげるべく「変わらない」覚悟で握り突き上げた両拳を、そつとなで下して開き手合わせる瞬間なのかもしれない。若かりし自分が少しロツクな気持ちで感じたことだ。ちよつと大げさかもしれないが。

今ならあの頃の自分にどんな風に声をかけてあげられるだろうか。変われない、そして変わらない私たちのものがきをもれなく「奇跡」として見届けてくれる不変のまなざしの在り処を、あなたはすでに知っている。きつと仏の眼にうつる私たち一人ひとりの命は、ときめきの魔法に満ち溢れたかけがえない存在に違いないのだ、と。

江戸の川
を歩く

第三十回

江戸ウォーカー

森清鑑

江戸川（利根川）

家康は一五九〇年、江戸に入府すると早速、大規模な新都市構想に着手する。江戸城建設、家臣の屋敷、大量人口移入用の住居、産業地帯の造成。食糧増産地帯の醸成。木材を初めとする、食糧・物資の流通経路の開発。それが川、運河の付け替え整備、掘削の大事業である。川の掘削は今日の道路網、インフラ整備と同じ。そして食糧の中でも基本は米と塩。当時、塩は現代の石油と同じ値打ちがあつた。そこで下総の国、行徳に目を付ける。良質の塩が獲れる、行徳一帯を大規模な塩田地帯の造成に着手。そして、行徳から江戸城まで一直線の運搬ルート、運河を掘削する。江戸城から辿ると、東へ道三堀、日本橋川、大川を渡つて小名木川、中川を渡つて新川を掘削する。こうして安定した塩の運搬ルートが建設された。当時は、このルートの側まで江戸湾の波が押し寄せていたのである。



家康入府以前、利根川は銚子ではなく江戸湾に注いでいた。その流れは複雑で、今日の隅田川（大川）から東へ、中川、江戸川までの低湿地帯は、大雑把に云えば、利根川の河川敷のようなものであった。頻繁に起こる洪水への対処が必要。しかしそれにもまして重要なことは、北からの物資を江戸に持ち込むための海路が十分に使えないことであった。銚子から南は黒潮に妨げられ、乗せられ、陸地から離れると偏西風に襲われ下手をすれば米国に辿り着いてしまう。家康は、二つの問題を解決する。それが江戸湾に入っていた利根川を銚子に向かわせる、いわゆる利根川東遷工事である。同時に関宿から江戸湾に落とす分流を造る。これが江戸川である。江戸川とは江戸に入る川の意味である。しかし、江戸の人々は江戸川のことを通常、利根川と称していた。雪旦や広重の絵のタイトルも皆、利根川である。そうした意味で江戸川こそ旧日の利根川そのものなのである。かくて北からの物資は銚子まで海路を使い、銚子でより小舟に積み替えて利根川本流に入り、関宿か

ら、江戸川を使い南へ下り、横に何本も掘削された運河を活用し、江戸城まで運ぶ水路が完成する。これは画期的な水上運搬路であった。

行徳へ（行徳塩浜）

江戸湾から江戸川を遡り、利根川本流の関宿までの船旅をしよう。まず、江戸と行徳を結ぶ塩のルート。小名木川を東へ直進。中川にぶつかる。左角に中川御関所。番所渡ししの舟に乗り中川の対岸に着く。そのまま新川（行徳川、船堀川）に入る。新川を真っ直ぐ進む。この川は東南方向に南に下がりながら流れている。辺り一面、緑豊かな船越村と東西小松川の田畑が続く。どんどん行くと、やがて江戸川河口に出る。この河口を渡ると、そこが行徳である。

塩田

当時の塩浜の様子はどうかであったか。江戸湾沿

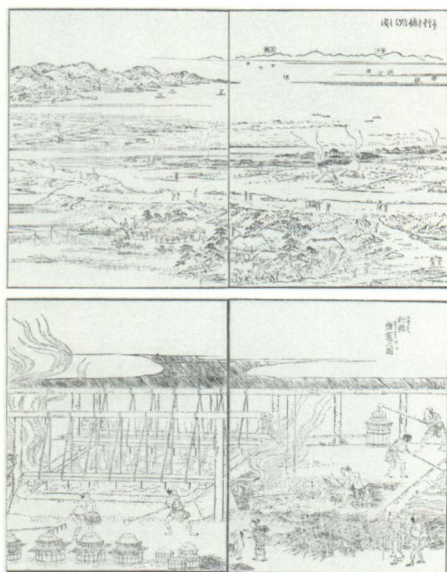
いに広大な塩田が広がり、あちこちから煙が立ち上っている。行徳の製法は塩田に海水を引き入れ、天日（太陽熱）や烈風で水分を蒸発させ、最後に煮詰めて完成させる。その燃料が周囲に無数に存在する蘆や葦であった。煙は小屋の塩竈に火を入れ、煮詰め作業場から立ち上っているのだ。立体長方形の塩竈の入りに葦や蘆の枯れ木を竈にくべている職人、その脇には葦や蘆の枯れ木が堆く積み上げられている。煙は竈の反対出口から立ち上っているわけだ。この塩浜と農村を分けるように江戸湾に向かって土手道がひかれている。そこには馬に乗る人、馬を引く人、籠に乗る人、鍬を担ぐ人、様々な人達が行き交っている。この土手道の手前は農家で、海側は塩田。江戸湾に帆掛け船が多数浮かび、遠方に上総の山々のシルエツトが描かれる。雪旦の「行徳塩浜」は当時の様子を見事に伝えている。

江戸時代、新川は三本に枝分かれして江戸川河口に流れ込んでいた。眼前は江戸湾の入江で正面に妙見島が細長く在り、当時は江戸湾の波がここ

まで押し寄せていたのである。つまり、行徳の海岸線は今よりずっと内陸側にあった。海に突き出た最先端が猫実村と堀江村であった。この二村を分けるように境川が流れている。これを右に回り返むと、広大な塩浜が出現する。広重は二村を割って流れる境川を江戸湾から江戸川河口に向かって描いている。絵の境川の右側が猫実村で左側の家宅が堀江村。絵の境川の先に江戸川河口があり、

雪旦・江戸名所図会「行徳塩浜」

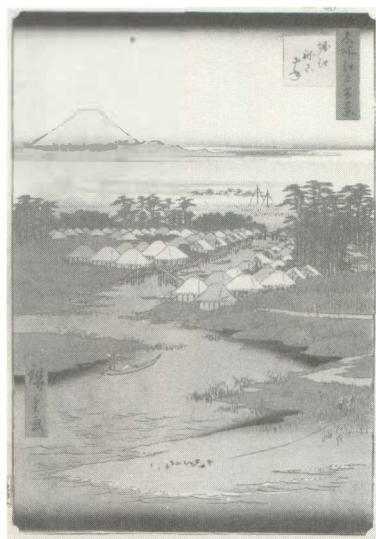
雪旦・江戸名所図会「行徳塩竈の図」



大型船のマストが見える。絵の左が半島の先端。絵の下は江戸湾の砂浜の始まりである。ここでは村人が網を砂浜に埋め、餌を撒き、集まった鴨を覆い被せて捕る無双返しの罠を行っている。この砂浜を右へ回ると左に塩田の風景が展開される。中央右の森は豊受神社で一二九三年の大津波では大変な被害を蒙ったため、堅固な堤防を築き、松の木を沢山植えた。以後、津波が松の根を越すことはなかったという。つまりここが当時海岸線に近かったということになる。

河口から北へ

新川から江戸川河口に出るとそこはすでに江戸湾入江と云って良く、眼前に細長く妙見島がある。そこでは蘆や葦が生え、ばらばら松が目立ち、妙見様が祀られている。周囲には投網を打つ姿、漁師が活躍する姿があり、江戸湾に浮かぶ帆掛け船、千鳥が舞い、波打ち際にある小屋では人々が寛いで漁師や遠方の景色にみとれている。ここから北



広重：「堀江ねこざね」

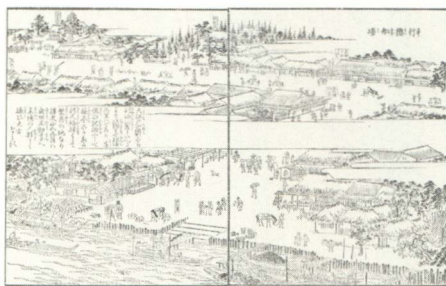
に向かって江戸川（利根川）を遡ろう。妙見島から北上。左を見ると新川が三本に分かれて州を形成しながら流れ込んでいる。少し行くと江戸川の流れは右へ。その曲がり角に今井の渡し場がある。江戸川に架かる橋はなかった。そして此処こそ行徳の塩を江戸に運ぶ、主要な渡しで繁盛を極めた。ここは新井村。それなのに今井の渡しとは。今井とは対岸の葛飾今井村の名をとっている。つまり、特に江戸初期には、江戸と上総の境界線のニュアンスが強く、そのため渡しと言っても塩の専用

ルートで上房からの一般客の舟は禁止されていたのである。一六四四（正保元）年、そこに悲劇が起る。故在って、江戸に逃げようとした男女が船頭ともに処刑される。人々は弔って石地蔵を建てる。それが「ねね塚」の悲劇である。この塚も江戸期の洪水で流されてしまったという。そこで記念碑は「ねね塚の跡」となっている。

行徳舟場

江戸川の流れは再び北に転じる。右を見ると押切村の家々。河口から川沿いに行徳街道が平行して走っている。この街道に沿って村々が続いているわけだ。堀江村、猫実村、当代島、新井。そして押切村。そこに行徳舟場がある。大変な賑わいである。雪旦の絵を見よう。下に利根川（江戸川）が流れ、多数の荷船、客舟が行き交っている。河岸。そして広場。そこら中に荷を運んできた馬が描かれ、天秤棒を担ぐ「ばてふり」、米俵を担ぐ者、旅の一団。左右に家宅が密集し、杭打ちされてい

る荷揚場には荷船が停泊。雪旦の絵では利根川と書かれている。人に乗せた客舟も多数。人や家並みは行徳街道に向かい、そこを歩く人々の多いこと。街道沿いには無論、家宅が密集している。行徳の繁栄ぶりが正に描かれていると言えよう。これから利根川も街道も国府台や柴又に向かつて行く（絵の左）。江戸時代、行徳は広範囲で今の市川、浦安南を含んでいる。



雪旦：江戸名所図会「行徳船場」

【参考文献】

「広重の大江戸名所百景散歩」人文社
「江戸・東京の川と水辺の事典」鈴木理生著 柏書房

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十八回

第三部

充実と稔りの白秋へ

愛弟子・長谷川良信と社会事業その三



教育正論と遵法自治

渡辺海旭が十余年にわたる留学生生活のなかで、最優先のテーマとして自らに課したのは、教育と社会事業であった。海旭はドイツから帰国すると、宗教大学（現大正大学）、東洋大学の教授に就任、翌年八月には、萩原雲来の後を襲って芝中学校の第三代の校長に就任、死去するまで二十余年間勤め上げた。

足掛け十一年もの長きにわたってドイツで仏教学をきわめ博士号を取得したほどの人物であれば、東京帝大の宗教学の主任になれるのに、大学の下的高等学校でもなく、さらにその下の中学校、それも出来て間もない一宗門の私学の校長を引き受けたのはなぜなのか。母校ということもあったろうが、そこには海旭なりのつよい思いがあった。校長を引き継ぎにあたって、前校長で留学仲間でもある萩原雲来とこんな会話をかわした。

「き、きみは仏教界の若き碩学だ、希望の泰

斗だ。大いに研究に打ち込むべし。し、芝中学はまかせてくれ。僕には、かねてから少年青年教育に考えがある。僕は教育は正だと思う、四つのしであると思うんだ」と切り出した海旭に、萩原は目を三角にして訊き返した。「きみはいつも僕を驚かす。正って、あの寺の記号か？　しってアルファベットのエルかね？」海旭が頷くのを確かめてから萩原はつづけた。「正ならわかる。でもそれがなぜ四つのしなのか、さっぱりだ」

「ま、正を分解するとしが四つできるだろう」と海旭は紙に図解してみせた。「四つのしとは、Licht（光明）、Liebe（愛）、Leben（命）、Libertas（自由）のことだ。まず第一のLのLicht（光明）と第二のしであるLiebe（愛）をもって人格を陶冶し、第三のしであるLeben（命）、生活を充実させる、そして、それをもって第四のしであるLibertas（自由）、すなわち高遠なる理想を実現する、これが教育の根本というものだ」

この「Ⅱ4 L教育論」は後に「芝中学校友雑誌」（昭和五年）に発表されるが、校長就任当初からの海旭の持論であった。Ⅱ4 L教育論は教育理念としてなかなかユニークだが、より海旭らしいのは方法論、つまりこの4 Lをどう具体化・具現化していくかであった。そこで編み出されたのが「遵法自治」であり、芝中学校の「校訓」とされてきた。

では「遵法自治」とはなにか。海旭は週に一回の「修身の授業」で、毎回のように、生徒たちにこの「遵法自治」の意味を説いたが、よく例に出したのが、「論語」の「己の心の欲する所に従って矩を超えず」の精神だった。

教育では、叱って躾けるは「下」とされる。そして「上」とされるのが、海軍元帥・山本五十六の策。すなわち、「言ってみせ、やって聞かせてさせてみせ、ほめてやらねば人は動かじ」。たしかに上策だが、海旭はさらにその上をいく「上の上策」である。何も言わず、何もしてみせず、じっと見守るだけで、ひた

すら考えさせる。ことさらにほめもしない。

ある生徒がちよっとした出来心から校内のパン屋のパンをくすねたことがあった。これが発覚して校長の海旭に呼び出された。当人は退学を覚悟したが、海旭は、反省しきりの生徒を赦し、出来心とはいえ私の指導の至らなさと自らを責めたという。

また、厳冬期に暖をとろうとやんちゃ連が、植木鉢を火鉢がわりにして、教室の床をこがして穴をあけてしまった。やんちゃ連は退学はまぬがれないと意気消沈していたところ、海旭は「あ、危ないからこういうことは止めなさい」と注意しただけで去っていった。

「遵法自治」の礎は「良き教師」にあり

「遵法自治」という自助自発の人間づくりは、一方で教師の起用にかかっていることを海旭はよく知っていた。海旭は教育思想家でもあるが、実はすぐれた教育事業家であり、もつとくだいていうと人事マネジメントの達人で

もあった。それが端的に示されたのが教師の採用（リクルート）である。

萩原雲来の後を襲ってあえて中学校をえらんだのも、もともと感受性がつよい年代にこそ教育のしがいがあり、効果もあると自身の体験にもとづいて直感していたからだ。そして、その無垢の砂のように物事を吸収できる生徒だからこそ、もとも大切なのは教師である、生徒たちを自助自発へと導くのもまた教師であると考え、そのためには手間も、そしてとかく宗教家が距離をおきたがる金の工面についても努力を惜しまなかった。

それを象徴するのが、芝中学校歌の作曲家であり音楽教師でもあった島田英雄のリクルートである。

明治四十三年三月に帰国した海旭は、萩原雲来から相談をうけた。

「音楽通のきみなら、校歌をつくってくれそうな人を知っているのではないかな」

海旭は二つ返事で引き受けた。帰国してか

らもオペラ狂いが直るはずもなく、日本人によるオペラがあると知って聴きにいき、そこで知り合ったオペラ仲間を通じて、格好の人物から了解を得た。その人物とは東京音楽学校研究科を明治四十二年に修了した島田英雄。首席というふれこみだけあって、あつという間に書き上げ、評判も上々で、海旭の面目も大いに立った。それから半年もたたないうちに、海旭は萩原から校長を引き受けることになり、真つ先にしたことは、島田を音楽教師として引き抜くことだった。ところが校歌のときにはすんなりいかなかった。

島田はこう言っていた。『失礼ですが、浄土宗の中学校で、私のような者がきちゃんと遇されるものでしょうか。音楽などつけたしなのではありませんか、飾りなのではありませんか。たしかに飾りとしては東京音楽学校出は価値がありますが……』

在学中に日本人による初のオペラにテノールをつとめ、学内で編成されたオーケストラ

に本邦初のオーボエ独奏者として参加、その後も声楽家・演奏家として活動している島田からすれば、こうも言いたくなるだろう。海旭はますますこの男がほしくなった。

「わ、私は十年あまりドイツにいて、彼の地の音楽教育の素晴らしさを誰よりも知っているつもりです。た、たしかに先生のような前途のある大器は、できたての中学にはもったいないかもしれません。しかし、もっとも吸収力のある中学生にこそ本物の音楽教育が必要だと私は信じています」

「ご自身は、音楽にどのていど造詣がおりなのですか……」

ずいぶん失礼なやつだが、海旭の短髪に僧服という外見とはげしい吃音が説得力を殺しているのかもしれない。リーゼントにフロックコートで颯爽とオペラ観劇にでかけたときに出会っていればと思いが、海旭は作戦を切り換えた。

「毎年のように食費を切り詰めて旅費をつ

くつてはバイロイトに出かけたものです。ワ、ワグネルのタンホイザーを聴きに。おかげで名場面だったら、いつでも暗誦できますよ」島田の目に関心が宿ったのをするどく見て取った海旭は、「タンホイザー」の名場面、大行進曲の「歌の殿堂をたたえよう」をいきなり歌ってみせた。

原語なのでどまることもなく朗々たる発声に、島田は思わず息を飲んだ。

すかさず海旭は言った。「し、島田先生、し、芝中学におこしいただけますか」

島田は思わず「はい」と答えてから、一呼吸おいて言った。「ただし一つ条件があります」「ほ、俸給ですか」と問う海旭に、島田は首を振って返した。「俸給はおまかせします。ピアノです、それもグランドピアノを備えていただきたいのです。」

これには海旭も即答に窮した。グランドピアノといえば舶来製しかなく、一台七百元はする。教職員全員の俸給の数か月分を超えて

いる。これから寄宿舎もつくらねばならない。理科の実験室も必要だ。

しかし、一拍をおいて海旭は「わかりました」と答えてあえて退路を絶った。とにかく宗門に掛け合い説き伏せるしかない。案の定、宗門は「音楽より数学や語学の優秀な教師を引っ張ってくるべきだ。音楽ができて一高や慶応に入れるわけではなからう。宗教大学に進んでも役にたつものでもなからう」といわれたが、「よ、よい大学に進学するだけの実用の学を教えるのが中等教育ではありません。よ、よき音楽こそ文化の基、人間性を涵養する滋養です。金を惜しむべきではありません」と敢然として反論して渋々ながら了解を得たのである。

かくして、島田とグランドピアノが芝中学にもたらされることになった。ところが、これほどまでに礼をつくし、金をつくして迎えた島田とグランドピアノであったが、生徒たちからは評判はよくなかった。よくないどころ

るか「音楽なんかんの足しになる」とあざけりの対象であった。親ならぬ校長の心生徒しらず、であった。島田を起用した海旭にも風当たりがつよく、ドイツ帰りのオペラ狂の道楽だという批判さえあった。

しかし、島田の評価が一変しただけでなく、海旭の評価も一変し、生徒たちの態度も一変する大事件がおきたのである。

校舎が焼けようと人は焼けない

大正五年二月九日、芝中是不審火によって校舎を全焼した。翌日から、辛うじて焼失をまぬがれた屋内体操場、興国殿、銃器庫を仮教室にして午前午後の二部で授業が再開されるが、焼け跡に黙然と立ち続ける海旭の姿に生徒たちは、畏敬に似たものを感じた。

何かを語りかけるわけではない、ただひたすら立ちつくして生徒たちをみつめている。生徒たちはその姿から声なき声を聞いた気がした。すなわち、

「学校という場は校舎ではない、人である。たとい校舎が焼けようと、人は焼けないのだ。」朝礼には焼け爛れた校旗が掲げられていたが、生徒たちの間から自発的に募金のはじまり、やがて新しい校旗が校庭にへんぽんと翻った。芝中生は、大正八年までの五年間、トタン葺き平屋のバラックで、夏は蒸し風呂状態、雨天にはトタンに当たる音に悩まされたが、新しい校旗が生徒たちをばしつづけたのである。生徒たちに共感を与えた人物がもう一人いた。

母校へかけつけた生徒たちは、焼け跡に立ち尽くして無言で生徒たちを督励する海旭とともに、ハンケチで鼻をおおいながら焼け跡からなにかを一つ一つ丁寧に拾い上げる人物を目撃した。その男とは、音楽教師の島田英雄。拾いあつめていたのは、無残に焼け爛れたピアノの鍵盤だった。

当時の芝中では三年まで音楽の時間があつたが、ほとんどが上級の高等学校をへて大学

へ進む生徒たちにとって音楽など無用の代物。また当時の男子の間ではパンカラを愛する気風が強く芝中も例外ではなかった。だから島田が熱心に教えようとすればするほど生徒たちは小馬鹿にして授業にならない。音楽教師・島田は生徒たちに弄ばれる対象ではあつても尊敬される教師ではなかった。思いあまつた島田は、授業中に悔し涙を流すことさえあつたが、残酷なことに生徒たちは、「泣き虫島田」とはやし立てるばかりだった。

焼け跡で鍵盤を拾う島田の姿をよく見ると、ハンカチで鼻をおさえていると見えたのは、火事場の臭いを避けるためではなく、ピアノを失った悲しみの余り、流れ落ちる涙をおさえ隠すためであつた。生徒たちは感動し、それまでの島田への接し方を大いに恥じた。同窓生も三々五々集つてきて、これまで島田をコケにしていた悪童ほど感動を覚えた。「あの泣き虫島田、また泣いてらあ」などと小馬鹿にするものは一人もいなかった。この

時から島田の評価は反転。このエピソードは生徒たちの間に伝わり、島田先生のためになにかをしてやろうという学内世論がわきあがってきた。

最終年次生は、毎年寄金をつのつて卒業記念の品を母校に寄附して行くのが慣習であった。その年は大火もあったことだし消火器にでもしようかなどという不埒な輩もいたが、生徒たちから「ピアノを買って学校に寄付し島田先生を慰めよう」の提案があり衆議一決。だがグランドピアノとなると、例年のように卒業生一人当り五十銭ではまかないきれない。そこで、生徒たちのアイデアで「芝中復興慈善音楽会」を催して基金を捻出することになった。仲間の親や親戚の手づるをつかってプロに無料出演を依頼。当時の少年少女の憧れの的だった三越少年音楽隊、声楽家の長坂好子女史のような気鋭（後に日本を代表する大家となる）の出演にこぎつけた。

当日は一般の客を優先するために在校生の

一部には退場してもらうほどの大盛況。興行的にも大成功で、新しいグランドピアノが学校に寄贈されたのである。

後になって、海旭はこの一連の「芝中復興慈善音楽会」の仕掛け人が寺崎太郎といって、一高から東京帝大へ進学して外交官になったと知った。もちろん生徒たちに自助自発をうながすという「上の上策」は一朝一夕にはならない。海旭の二十余年の芝中学校長生活のなかでも思うようにいったわけではない。しかし、しかるべき「時」を得れば海旭が芝中学の校訓とした「遵法自治」が奏効することがあると知って、生涯忘れることができない思い出となったのである。

蛇足を加えれば、もし寺崎太郎が後に対米交渉の責任者として日米開戦を必死になって止めようと画策したことを知ったら、海旭の感懐はより深くなったろうが、残念ながら海旭はそれを見届けることはできなかった。

（つづく）

講 師

賴住光子

釈尊より法然へ 大乗仏教における浄土宗

よりずみ みつこ

1961年神奈川県生まれ。東京大学教授・文学博士・文学部倫理学研究室。
日本倫理思想史を専門とする中で日本仏教を研究、道元の『正法眼蔵』、
親鸞の『教行信証』などをテキストとする中、法然の『選択本願念仏集』
に注目。釈尊からつながる法然上人をとらえ直して、浄土宗の魅力にせ
まる。著書『さとりと日本人：食・武・和・徳・行』（ふねうま舎）ほか。

会場 **東京 芝 大本山 増上寺 慈雲閣 1F ホール**

- 東京都港区芝公園4-7-35
- 地下鉄都営三田線芝公園または御成門下車徒歩3分
地下鉄都営浅草線大門下車徒歩5分
JR浜松町下車徒歩10分

6月18日(火)

午後1:30開場 2:00開演 (3:30終了予定)

会費 1,000 円
(当会会員無料)

問い合わせ先 法然上人鑽仰会

〒105-0011 東京都港区芝公園 4-7-4 明照会館 4 階

電話：03-3578-6947 FAX：03-3578-7036

161

さっちゃんねネッ

かまち♡よろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

編集後記

薄衣見えているのかいないのか 岱潤

今年は悲惨な交通事故が多発している。中でも幼児や子供が巻き込まれる事故には胸がつぶされる思いがする。また高齢者の事故が多く世間の注目を集めている。先日町会の会議で、毎日運転している方が、七〇歳で免許の更新に行つたところ、さまざまな能力テストがあり、少しうんざりしていたが、目の検査で、真つ暗な部屋に入れられ、遠くから〇の一角が欠けた例の記号が出てきて、だんだん近づいてくるので、わかつたところで答えるのだが、ぼんやりとぼやけてしまい、五〇秒もかかってしまったそうだ。

一分でアウトということで、ギリギリセーフだが、「いや、焦ってしまいました」と、目の衰えを自覚したそうだ。暗いところでははつきり見えなくなっているのは、私自身も運転していても実感していることだ。車の運転で被害者ではなく、いつ加害者になるか、そんな恐怖心もわいてくる。

昔の武士の御法度に、「酒に酔つて人に頼み事をするな」とか、「酔つて人を打ちのめすようなことをしたら、首を切る」などと書かれた藩もあつたそうだ。常に武器を身につけ腕に覚えのある武士は、酒が入るだけで危険な存在だったのだろう。

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森厳寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
松溝泰彦(芝・寶松院)
真野龍海(芝・天光院)
水科善隆(長野・寛慶寺)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>
メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

現代、車は便利であるが凶器にもなりかねない。酒など飲んだらもつてのほかだが、夜の運転、トンネルの多い箇所、運転は、高齢になった今は控えた方がいいと、自分にも言い聞かせている。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十五巻六月号 頒価六百円
年費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 令和元年五月二十日
発行 令和元年六月一日

発行人 佐藤良純
編集人 加藤昌康

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇〇一

東京都港区芝公園四七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

貧乏骨董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



ポット／高さ 95mm
杯／口径 85mm、高さ 40mm

ポットにも浮き出模様があるが、摩滅してなにを描いているのか不明。杯の模様は一部擦れているが、はっきりしている。

写真の駄那のポットと杯は、モンゴル料理店の片隅の棚に埃を被って並べられていた。店はそれほど積極的に売ろうとしていないわけではなさそうである。骨董とは言えないモンゴルの日常雑器だ。

店員に値段を聞いてみると、ポットが三百円、杯が三個で二百円だと言う。埃をはらってポットを手にとってみる。高さは一〇cmもない。ところどころ駄那が剥け落ち黒ずんだ錆びが出ている。蓋と本体を繋ぐ部分など、きわめて単純な構造である。あまり上等な作りではないが、かえってそれが好ま

しい。実用に耐えるものだとは思われないが、飾りとしては申し分ない。実際のところこの大きさでは何を入れたらいいのかわからないのだ。杯も描かれた模様が面白く両方買うことにした。

モンゴルの遊牧民の酒に、馬の乳から作られた馬乳酒（アイラグ）がある。アルコール度数は一〜三%と少ない酒で、どちらかというと日常的に飲まれる乳製品であり、栄養飲料でもある。

このポットが馬乳酒を入れるものかどうかわからない。あるいはこれもモンゴルを代表する飲料の、塩味のミルクティーを入れるのだろうか。杯はそんな感じもするのだが。杯に描かれているのは花だろうか、それとも雲だろうか。稚拙といえばそのとおりなのだが、どこか心惹かれるものがある。

飾りとして買い求めたのだが、蓋を開けて水を張り、ペランダの花を上げようとしたところ、蓋が重すぎて倒れてしまった。これでは花瓶にもならない。結局店に置かれていたのと同じ状態で、台所の片隅で埃をかぶることになってしまった。

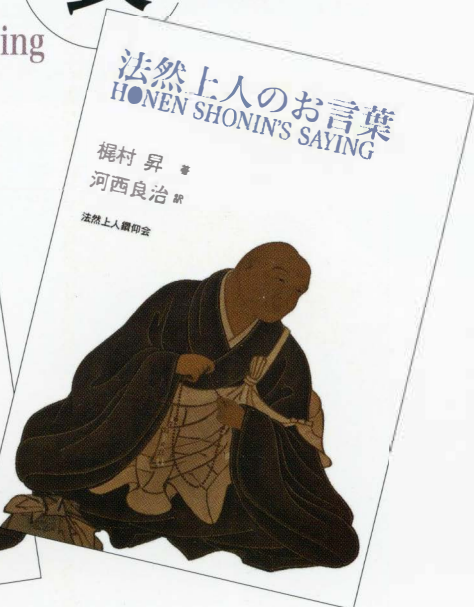
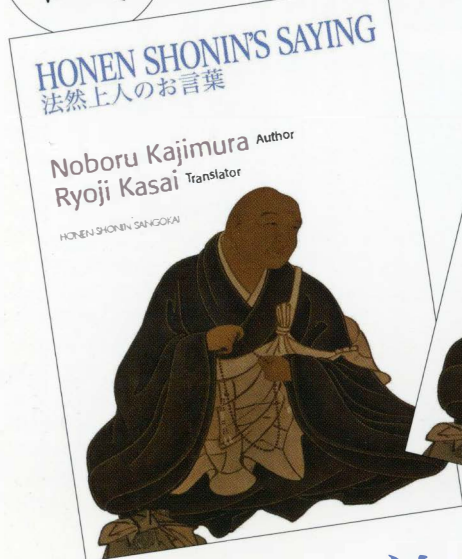
月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表

右開きで和文の
ご法語



和英対応**法然上人のお言葉**

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人鑽仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人鑽仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。